

News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

交流への道を求めて

西村 博行

〔前京都大学国際交流委員・評議員（農学部留学生室担当）
農学部教授・農林経済学教室〕

留学生への福利・厚生的一端として、留学生を対象とした行事や活動が農学部でも定着してくるようになったことは喜ばしいことだ。言語、それに生活・社会の条件、そして教育・研究の制度や慣行がそれほど違わなければ、国際交流とか留学生へのサービスなど、口やかましくいわないでもすむ。しかし、現実がそうでないから、留学生へのサービスは特に重要になってくる。

ところで、本学のような総合大学では国際交流センター（現留学生センター）があるから、それで十分ではないかと考える方もあるだろう。それでは農学部留学生室やこのニューズレターはどんな役割を果たしているのだろうか。1985年から4年間を京都大学国際交流委員としてつとめ、農学部ではこれらの創設や創刊にたずさわった1人として、私達が目指した意図と、今後にかける私自身の期待を述べてみたい。

農学部での交流といえば、農学に関わる研究と教育についての情報交換・啓発と関係者間の意志の疎通を図ったり、活動のあらましを内外へ知らせることであろう。農学部留学生室が設けられ、そこで扱われる活動となれば、当然、外国人留学生へのサービスを重視した活動ということになる。事実、外国からの農学部への留学の問い合わせ、情報提供から始まり、農学部へ入学あるいは研修に来た外国人へのガイダンスやカウンセリングをすることは経常的に行なわれている。農学部における特徴としては各学科や専攻のガイダンスを補ない、学部のような付属施設を紹介することで、学業・研究生活を有意義に過ごすことができるようにしている。

ガイダンスの後で新入生歓迎パーティーをしているが、このパーティーでは、農学部の先生や事務室職員の御協力を受け、先輩が関与しておられる企業からの御配慮を得て、留学生室担当者も一緒になって、会場の設営や物品の調達をしてきている。農学部の内部で後援会を設立し、教官・事務職員の方から募金をして、その資金で必要な予算をまかなってきたが、この事業はどうやら安定した経済基盤を得るようになった。

農学部留学生室で実施する教育については、創設の当初から、担当教官による講義が行なわれてきている。さらに、わが国の農業の動き、そして農学研究の仕組みや現状についても、毎年、それぞれの専門領域の教官にお願いして講義をして頂くシステムで今日まで運営してきた。この他、農業の現実を理解し、農業研究の過程やその応用されている現場を学ぶことも有益であるから見学旅行を行ない、それに加えて、各専攻や講座で行なわれている見学旅行についても他専攻の留学生のために開放して頂いている。時に

は他学部で学ぶ外国人からの参加希望者があって、好評であると聞く。

国際交流は制約や障害になっている条件をできるだけ取り除き、その活動は無理をしないで自然な形で息長く続けることが好ましいと私は思っている。ニューズレターの創刊を企画した時から、留学生室が編集を担当するとしても、広く、将来につなぐ国際交流ができるように努めることが必要だと思ってきた。留学生が自分達の学習や研究が軌道に乗ってきたり、帰国する頃になると、周辺や関連する領域の研究へも興味を示してきたりするので、このような志向の変化についても考えておく必要がある。また、志を遂げて帰国し、管理者となったり、あるいは国際機関で働くようになると、留学先を紹介したり、あるいは、自らも研究交流を試みるようになったりする。

私の限られた経験ですら、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなどの各地で、管の教え子であった外国人が様々な機関で要職についているし、若い人々、しかも自分とは違った領域の人達を、留学生として紹介してきたり、われわれと協定を結んで共同研究をするようになってきている。

現在、農学部には留学生の他、様々な形で外国から訪問される教授や研究者が滞在し、おりの訪問者もあって、人の交流は絶え間がないといってよい。私はこのような方にも一緒に参加してもらえぬ国際交流活動、ニューズレターの編集、講義や見学旅行へのサービスなどを、留学生へのサービスに加えて、積極的に企画することが好ましいと考えている。

このような企図に御賛同頂き、これまでも増して、交流に関わる皆さん方からの御協力を期待したい。



タイ国からの訪問学生を迎えて
説明する筆者：右隣りは岩井前学部長

An essay by the honorary doctor of our Faculty



Tage Rickard Eriksson

(Professor emeritus
Uppsala University
Sweden)

Last year I visited Japan as a FY 1992 visitor and I stayed 2 months. I was invited by JSPS (the Japan Society for the Promotion of Science) under the JSPS-RSAS (Royal Swedish Academy of Sciences) agreement. My host scientist was Professor Yasuyuki Yamada, Molecular and Cellular Biology, Department of Agricultural Chemistry, Faculty of Agriculture, Kyoto University.

It was my twelfth visit to Japan and I received a very warm "welcome back" by colleagues and friends at the Agriculture Faculty. Kyoto University is the research place abroad I most often have returned to, for work or meetings during more than 30 years in research. During this time the progress in Plant Biotechnology has been fast and great. The achievements in Kyoto have always been available at an early stage for us in Uppsala. The hospitality, the generosity, the friendship of the people in the Institutes together with the cultural heritage of Kyoto are deeply touching me. Everything is so well organized and the smallest things for housing and transportation are thought about. Therefore, never any problems during longer or shorter stays in Kyoto. This time I also stayed two weeks in the laboratory of Professor Hiromichi Morikawa, Botanical Institute, Hiroshima University. It was two fruitful weeks when I made my first experience of DNA bombardment of plant cells and tissues. This line of

research was also going on in Kyoto but also advanced cell biology and very interesting plant molecular biology and plant biochemistry. It's no exaggeration to say, that the research is at the frontline in these two fields.

In spite of good contacts with Japanese scientists and many visits to Japan I have not learned their language. I have however, very recently attended a course in Japanese in Uppsala. The language barrier is the only problem I have and that is mainly outside the Institutes. It's a pity that Japanese students don't practice speaking English during all the years in school. This has certainly been underlined many times long ago but I have been noticing only a small improvement over the last 20 years. Since the students at high school are smart and hard working it should be possible to include more practice in speaking English. I think that it's not to be expected that we foreigners should improve our knowledge in Japanese in the future.

December 7th, I received "the Honorary Degree of Doctor of Agricultural Science" at a very solemn reception in the office of the President of Kyoto University. This fantastic day ended with a big dinner at Miyako Hotel in Kyoto. It was one of the greatest days in my life. Many thanks go to President Imura, Dean of Agricultural Faculty and Professor Y. Yamada and his many co-workers and students.

Now, being back in Sweden and my old University in Uppsala for about 2 months I am missing the exotic Japanese food such as tempura, sashimi and sushi as well as the very good Japanese beer. The Japanese food in general is well prepared and more healthy than most Western food, I think. It's easy to live in Japan since everything is available and of high quality. Therefore, any time I get the opportunity to go to Kyoto and Japan I will do so. Kyoto has become my second home and a place I long for.

ウプサラ大学名誉教授ターゲ リカルド エリクソン氏 にたいする京都大学名誉農学博士の称号贈呈に寄せて

平成4年12月7日京都大学総長室において、京都大学名誉博士称号の贈呈式が行われ、スウェーデン王国ウプサラ大学名誉教授ターゲ リカルド エリクソン氏に京都大学名誉農学博士の称号が贈呈された。贈呈式の午後には京都大学附属図書館 AV ホールにおいて、「高等植物における発生の制御—最近のアプローチ」と題して、同氏の記念講演が行われた。また、当日夜には都ホテルにおいて、井村 裕総長ご夫妻主催の祝賀会が催され、エリクソン氏ご夫妻はなごやかな一時を過ごされた。

スウェーデン王立科学アカデミー会員、ウプサラ大学名誉教授ターゲ リカルド エリクソン氏は、植物組織培養研究が始まって以来今日まで、多年にわたり優れた業績を挙げ、今日の植物科学の進歩に貢献するとともに、国際的にも植物組織培養の研究に多大な影響を与え続けてきた。

同氏は、1972年来日以來十数回におよび本学を訪れ、農学部の植物組織培養の研究グループとの研究交流を続けてこられたが、特に、1988年3月から1年間は、農学部客員教授として在任し、本学農学部における植物組織培養学並びに植物分子細胞学の研究に直接関与され、研究者との議論に活発に参加された。その間農学部の学生、大学院学生には、植物組織培養研究の発展こそが今日の植物分子細胞学の発展の基礎となっていることを説いた。また、この間、日本国内の多くの研究機関を訪れ、講演会やセミナーをされた。

同氏は、短いお話(小話)が大変得意で、研究の合間には研究室の人々を楽しませてくれた。近い内にまた来日され、新しい小話をお聞きするのを皆楽しみにしている今日このごろである。

(大山莞爾
農学部教授・農芸化学教室)

新しい留学生室担当講師 野瀨 正氏のプロフィール

農学部では、1985年に留学生室が設置され、現在岡川、河合の二人の先生によって、外国からの留学希望者に対する連絡、アドバイス、新入留学生に対するオリエンテーション、見学旅行の立案・実行、農学部の国際交流機関誌 News Letter の発行、その他、留学生の修学及び生活上のいろいろな問題に対する助言・指導をして戴いているが、河合明宣先生がこの程放送大学に助教として転出されることになり、その後任として林産工学科・助手の野瀨正氏が選ばれました。

野瀨正先生は、これまで、林産工学科木材構造学講座に於て、電子顕微鏡を武器に、樹木の心材化、樹木の損害などについて数多くの論文を発表してこられた優れた研究者ですが、1988年3月からこの4月までの5年の間に、2年3ヶ月に亘り国際協力事業団(JICA)の長期並びに短期専門家として、タイ国カセサート大学とパプアニューギニア森林研究所に滞在し、異文化をもつ人達と親しく接する貴重な体験をしておられます。野瀨先生の誠実なお人柄とこの貴重な体験は、農学部留学生室講師に最も相応しいものとして大いに期待しています。

(岡村圭造
農学部教授・林産工学教室)



カナダ雑感

鄭 国 華

(カナダ・サスカチュワン大学客員研究員
本研究科農学専攻修了)
中国

“日本が凄い！”10年前に初めて日本の地を踏んだ時にそう思った。多分、多くのアジア諸国からの留学生は日本に来て最初に得た印象は私と同じだろう。ちょっと違ったのは10年前に日本の経済に対してだったのが今は全般に広がったのかもしれない。しかし、こんな“凄い”ところに居ながらもある種の“物足りなさ”が心のどこかに潜んでいたような気がする。それは多分“世界が見えない”というナウイフレーズで表現できよう。

10年後の今日、地球の裏側に来てまた同じ感じがした、“やっぱり日本が凄い！”。“世界がよく見える”北米に来ていちばん目につくものは日本車だ。こちらはとても広い割りには公衆交通工具があまりなく、車なしでは動けないとまでいかないにしてもかなり不便だ。車を買おうと洩らしたところ、皆は“買うなら、日本車だ”と強く勧められた。結局、同年代の FORD より20%高い値段で NISSAN に手を打った。暫くしてから分かったのだが、車に限らず電気製品のすべては日本製が最も評判よく、値段も幾分高い。

日本を離れる時、手持ちの家具類の処理にちょっと困っていた。やく半年前に買ったものを捨てるには惜しい上、金がかかる。友人に譲るにも近くに貰ってくれる人がいない。中古屋さんに見積もってもらったところ、電気製品の幾つかは時価の1/3以下の値段で引き取ってくれと言ったが、2万円かかって買った木製の机がただでも引き取れないと頭を横に振った。結局、この机は“誰かに拾ってもらえるのかも”と願いつながら“燃えるごみ”の仲間に入れた。しかし、こちらでは日本で感じれない、物を大事にする心は私達中国人でも感心させられる。週末の新聞を開いてみると、“GARAGE SALE”のコマーシャルが3~4ページにも続く。町を車で走ってみると、あちこちに“YARD SALE”や“GARAGE SALE”の看板が立っている。こんなところはどこでも人で賑わっている。“SALE”に出しているものはというと、HAND CRAFT からゴルフセット、画像がほとんど見えないテレビまで実に豊富だが、新しい物は一つもない。いや、正直言って日本のごみに出ている物よりも遥かに古いものばかりだ。これらのものを眺めながらも物を大事にすることを覚えた。

大学でも“JAPAN, GREAT!”の声がよく聞こえる。その言葉の真意を探ってみると、幾つかの SOUND がする。一つは勿論日本の経済力に対する率直な感嘆だ。もう一つは日本人の勤勉さに対する不理解や、風刺かもしれない。しかし、何れにしても自分に対する反省の声ではない。日本では“日本人が働きすぎる”との反省の声をよく耳にするが、こちらでは同じような批判の声しか出ない。もっともこちらの会社員から国家公務員まで皆5時の退社時間に備えて4時半ごろからうずうずしているのだから、そう批判しなくては訳がつかないが、しかし、どうして“人間本来の姿”を強く主張している日本人たちが労働という人間の本能にそう神経をとがらさなければならないかは理解に苦しい。“楽しむ本位”っていうのは現代人の“病気”ではないだろうか。

こちらに来て痛感しているのは日本はやはり基礎研究に入れている力が足りない。とくに、国の経済力に比べて大学への投資はまだ少ない。日本では今そこそこの会社でも大学よりも資金と設備の面で研究条件が優れているところが少なくないが、こちらでは大手会社を除いて大学の条件が断然よい。日本に比べて大学の施設はより整っている。キャンパスも綺麗な。今は、経済不振に見舞われなが

らも大学への投資は国が確保している。また、同じ農学研究でも日本は伝統的な“実用主義”を保ちながらも、もっと理論的に行ってほしいと常々思う。

ある友人はこう言った：“アメリカは今世紀にソビエトを潰した。次のターゲットは日本だ”。これはただの冗談ではないかもしれない。

留学生の眼 (9)



私の日本留学

韓 奎 成

(韓国・忠北大学林産加工学科
本研究科林産工学専攻修了)

私は結婚式を挙げた後、花嫁に「新婚旅行は日本の京都へ」といい、花嫁の了解を得て新婚旅行を延期した。実はそのとき既に日本への留学が決まっていたからである。結婚十日後、神社、寺、庭を浮かび出させる京都に着いた。しかし、ゆとりある新婚旅行は夢のような話であった。日本での生活が安定し、ようやく暇を作る余裕ができてから、私たち夫婦は自家用車である自転車の輪を回し始め、平安文化を吟味し、京美人の鴨川踊りも楽しめるようになった。

興奮と不安とで始めた留学生活は、あっという間に三年の歳月が過ぎ、やっと京の四季に慣れるようになった。色々とカルチャーショックを受けたり、挨拶に関する礼儀さえ知らなかったので多くの方に失礼したことなどは、今となっては思い出のページを飾るようになった。しかし、日本の文化や歴史、社会などについて知りたいことはまだまだ多い。日本の自然にも触れてみたい。真の日本理解とは、その自然と調和して暮らしている人々の姿を心から理解することなのであろう。また、平凡な人々のありのままの暮らし方を理解することこそは我々を国際化へ導く最善の近道であらう。

去る'90年三月に博士号を取った私は、その間、研究に専念し大いに勉強させて頂いた。多くの日本人とふれあって、日本人の優しい心が読み取れるようになったのは何よりの収穫であったと感じている。日本で学んだ留学生は、帰国した後何らかの形で母国に貢献するだろう。私の場合は講壇に立ち後進養成に尽くしたい。そして、韓国の将来を担う若者に日本人の心を正確に伝えたいと考えている。日本と韓国の間には、古代から歴史的に切り離されない深い関係があったが不幸な過去もあった。しかしこれからは、一時期は差別用語であったが、かつては友好的に使われていた「朝鮮人-倭人」という言葉で再び呼びあえる関係に戻りたいものである。真の日韓親善の輪を広げるため…

交流の歩み (5)

SOME PARTS OF MY LIFE IN JAPAN



Suchila Techawongstien

(Dept. of Horticulture,
Fac. of Agriculture,
Khon Kaen University,
Thailand
Nogakubu Alumnus)

“Agricultural science and myself” or “My life in the laboratory leaving my family at home” or “The significant role of Agriculture that could play in the developing economy of my country” is the topic that I am assigned to contribute in this Newsletter. As a matter of fact if some of my friends those who know me well still study in “Kyo Dai”, they would know which topic that I would like to tell. Since,

I am the one that so many of my friends call “Akarui onna no hito” that means “relaxing girl or always cheerful”. Therefore I would like to tell about some parts of my life in Japan, particularly some of my funny parts.

Student in foreign country normally faces some problems since their first step stumped on aboard. Certainly, this is also for myself, especially the big problem “language barrier”. My first day in Japan, April 4, 1989, there was not so much of trouble because I went there with many of Monbusho Scholars. However, on that day I just realized that how strict in English pronunciation of Japanese, i. e. I should say “Miluku” instead of “Milk” otherwise some of Japanese do not understand. I spent my first night at the Osaka Airport and went to Kyoto by taxi in the next morning. Nearly 1 hour in the taxi I did not say any words with the driver except “Ko-re”. At that time the driver could not find “Shugakuin International House”, the dormitory that I was supposed to stay. During he was trying to phone his office, I suddenly saw that dorm. ’s banner and said that word automatically. Although this word is not correct but in that situation the problem was solved. After I walked and walked 2 or 3 rounds nearby that dormitory, just tried to have lunch. Finally I decided to choose one of them. It was lucky that the tiny restaurant was “Gyu Don” shop. Basically, it is so easy to order the food in this kind of restaurant because it has only one dish. Still I didn’t know how to order, just only tried to stare at the owner. He asked me something, surely I could not understand. Wisely he was, he instinctively knew that I am a “Gaijin”. He showed me the menu which has only two pictures, one big and one small bowls of “Gyu Don”. That’s “I got it”.

Please don’t be terrified that I will tell you all about of my story day by day until my last day in Japan, even I’d like to do so. Those above stories are just only a few parts of my life in Japan. There are still so many of my funny or clumsy or dumb stories left which I do hope that other foreign students may have such experiences as mine.

I know that some of “Ryu-gakku-sei” are normally suffered from their life in Japan. Some are suffered from language barrier while others from unsatisfied results of their researches. In my case, I always feel that I am lucky. I could go along well with all of my Laboratory’s members, my friends in other Lab., and also many other friends in my dormitory. Most of all, I have the great understand-

able sensei, “Prof. SHOJI SHIGENAGA” and “Assoc. Prof. EIJI NAWATA”. Both of them kindly looked after me not only for my research, also my daily life in Japan. Even when my husband, my daughter and two of my nieces, came to visit me in Japan, everything were already arranged e. g. traveling plan, hotel reservation etc.. Again, after finishing my research I had an opportunity to visit some other Universities and private company by their kind arrangement. I totally agree with many of my friends who said that “I am a lucky girl”, since I was happy through 3 years long in Japan. Moreover, I could finish my Doctor Degree within a very short period of time.

On behalf of “Ryu-gakku-sei”, I would like to list some notices that I have gained from my experiences in Japan. They are:

1. Try to make some agreement with your sensei in the topic and works of your thesis that should be available for your Lab. ’s facilities and also convenient for your ability
2. Push all of your effort on your study and research works, but don’t forget the time for refreshing yourself
3. Don’t push yourself in any difficulty, except from your works, i. e. choose the nearby dorm. even if the fee is a little higher
4. Join your life with other friends some time, not only your Lab. ’s member, and you would know the meaning of “That’s what friends are for” well
5. Please keep in mind that Japanese have their unique history and culture for a long time. Politeness and discipline are important in this country like in other Asian countries, however it dose not mean throwing your self-confidence away.

I hope that these above notices may help the foreign student’s life a little more easy in Japan.

This essay will not end completely without telling some parts of my life after returning from Japan. At present I am very happy with my family and works. My works are going quite well in both of my routine work as an Assistant Professor in Khon Kaen University, and also my research works, I am doing my research on vegetable breeding i. e. chilli pepper, tomato and some kind of crucifer crops.

Hopefully I will be back to “Kyo Dai” some day.

留学生室ニュース

京都大学名誉農学博士の称号贈呈

1988年3月から1989年2月まで当時の本学部生物細胞生産制御実験センターの遺伝子資源研究領域客員教授を務められたウプサラ大学名誉教授の Tage Rickard Eriksoon 氏に対して平成4年12月に初の京都大学名誉農学博士の称号が贈呈されました。これを期に同教授から本ニューズレターに御寄稿を願い、また農芸化学教室の大山莞爾教授に、プロフィールを紹介していただきました。

農学部私費外国人特別選考試験

平成5年度の私費外国人特別選考試験には本年度は応募者がありませんでした。

農学研究科博士課程後期編入学試験の状況

平成5年度農学研究科博士課程後期編入学試験考査は、1月27日、28日に行われ、18名が合格しました。この内私費外国人留学生は農芸化学専攻（韓国）、農林経済学専攻（中国）、食品工学専攻（韓国）の3名でした。

留学生専門教育教官の人事移動

留学生室を担当していた岡川長郎講師は京都大学留学生センター、河合明宣講師は4月1日付で放送大学へ転任になります。代って、新たに林産工学教室から野淵 正講師が留学生室を担当することに決まりました。残りの一名は現在後任者を選考中です。なお岡村圭造農学部国際交流委員に野口講師のプロフィール紹介を

いただき本号に掲載しました。



Tage Rikard Eriksoon 氏に対する京都大学名誉農学博士の称号贈呈式：後方は同氏夫人と久馬学部長（庶務部広報調査課提供）

発行所 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部留学生室
電話 (075)753-6298, 6299
印刷所 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社
電話 (075)441-3155~8